

# OMEPP京都大会に参加して(その1) 保育・幼児教育におけるSDGsとESD

光橋 翠

土谷 香菜子

(大学院生)

今号と次号にて、OMEPP京都大会に参加したお茶の水女子大学の大学院生による参加報告を掲載します。今号においては、前半で「持続可能な開発目標(SDGs)」と「持続可能な開発のための教育(ESD)」に関する二つの基調講演について、後半で特別企画の「英語論文投稿ワークショップ」の他、ポスター発表についてご報告します。

基調講演：「ECCCEを皆の関心事に」

—SDG4.2からみるアジア・太平洋地域—

講演者：林川眞紀先生(ユネスコ・バンコク事務所、インクルーシブで質の高い教育担当チーフ)

本基調講演では、林川先生より、アジア太平洋地域の乳幼児期のケアと教育(ECCCE)。

early childhood care and education)の普及状況及び課題についてお話を頂きました。SDGsとは、2015年9月国連サミットにて採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」のことであり、2030年までに人類が達成すべき17の目標と169のターゲットが記されています。中でも四つ目の「SDG4」は教育に関する目標であり、その中のSDG4.2は「2030年までに、全ての子どもが男女の区別なく、質の高い乳幼児の発達・ケア及び就学前教育にアクセスすることにより、初等教育を受ける準備が整うようにする」と述べています。

光橋 翠 (みつはし みどり)

お茶の水女子大学大学院人間発達科学専攻  
保育・幼児学領域。

林川先生のお話によると、ユネスコはSDG 4.2をSDG 4全体を達成する重要な柱の一つとして位置づけています。そこで、SDG 4.2について、実施戦略や評価指標などに言及しつつ同地域内の達成状況をご説明くださいました。その中で、同地域内でECEは安定的に拡大している一方で、実施戦略の一つである「一年以上の無償かつ義務的な質の高い就学前教育」の達成状況が緩慢であるなどの課題も多く、今後、地域間の協力体制の強化が必要であると話しされました。

本講演をお聞きして、発展途上国を含む同地域内においては、保育の拡大と質の向上を同時に進める必要があるため、各国間の相互交流が求められていると感じました。

### 基調講演：「科学技術文明の中での子どもたち

「生きものとして生きno.1は」

講演者：中村桂子先生（JT生命誌研究館館長）

ESDにかかわる基調講演として、生命誌

研究者である中村先生によるご講演がありました。先の林川先生のご講演はSDG 4.2についてでしたが、中村先生のお話は、同じSDG 4の中でもSDG 4.7である「全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」というESDにおける学びの在り方に関するものと言えます。

昨今の教育界の議論では、未来の社会に求められるスキルとしてコンピューターや英語力などがもてはやされる傾向がある中で、中村先生はこのような風潮に疑問を呈します。人間は「生きもの」であり、効率性や新規性が重視される「機械」とは異なります。38億年前に地球上に出現した一つの細胞から、時間をかけて紡いできた生命の歴史が、DNAとして私たち人類を含む全生命の体内に息づいているのです。ところが、人間は自らが生きものであることを忘れ、自然を支配するという観点から近代化を進めてきました。そし

て、その中で、本当の意味での「生きる力」とは何かを見失ってしまっていると中村先生は指摘します。その上で、生命とは命を生きるプロセスそのものであり、だからこそ、生物の中でも人間が豊かにもっている想像力や創造力を子どもと共に、ゆっくり育んでゆくことが大切であるとお話しされました。

中村先生のお話をお聞きして、持続可能な社会構築に向けて、その根幹として求められる価値観を育むために、人間もまた生物の一つであり、自然の一部であることを子どもに伝えることの大切さを実感しました。「光橋」

### 特別企画 「英語論文投稿ワークショップ」

講師：Dr. Sandie WONG (Macquarie University)

Dr. Helen LOGAN (Charles Sturt University)

OMEPP京都大会では、初の試みとして、英語を母国語としない学生と研究者を対象に英語論文投稿ワークショップが開催されました。WONG先生とLOGAN先生を講師にお迎え

し、15名が参加するインタラクティブなワークショップとなりました。

前半には、英語論文執筆における注意点として英語と日本語の構成の違いについて説明があった後、英語論文のアブストラクトの構成と何を述べるべきかについてのプレゼンテーションがありました。その上で、英語論文全体の構成や、全体のストーリーラインを立てることにについて、具体例を挙げて説明してくださいました。後半は、参加者が準備してきた各自のアブストラクトを基に、グループで相談しながらアブストラクト、背景、本文と箇条書きで書き出すという実践を行いました。最後に、海外ジャーナルに日本の教育実践を英語論文として投稿する場合には、文化・社会的な背景や歴史などを十分に説明し、日本における「研究の意義と目的」を明らかにしておく必要があるというアドバイスを頂きました。ワークショップ参加者は、講師のお二人の先生から、英語論文投稿に挑戦する

勇気を頂きました。

## ポスター発表

OME P 京都大会全体のサブテーマと同じく、ポスター発表においても「SDG 4.2」「子どもの権利」「Play（遊び）」「専門職養成」「ESDの多様性」の五つのテーマに分かれて、発表が行われました。私は、Play（遊び）のカテゴリーで「Exploration of STEAM framework through 'light table' with young children and teachers（ライトテーブルを通してSTEAM教育実践枠組みの探究的研究）」と題したポスターを発表しました。Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Art（芸術）、Math（数学）は、米国で1970年代に理系人材育成による産業技術の強化を目的として始まり、その後、世界各国の文化や社会背景に沿って展開してきました。最近日本では高等教育の学習内容でよく取り上げられ、理系教科の横断的な学習

の重要性が議論される際に頭文字を合わせたSTEAMとして取り上げられることが多くなってきています。先述のSDG 4.7の「全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」という目標は、STEAMの枠組みにも通じるところがあり、環境問題の解決や、持続可能な社会の実現のために、STEAMが重要な役割を果たすことが期待されています。

ポスター発表では、タイや香港からの教育実践者や日本の研究者と意見交換を行いました。タイや香港などの東南アジア圏では、STEAMの実践に近年注目が集まっており、STEAMのA（Art）はどのように定義できるのが話題となりました。また、日本の研究者らとは、幼児教育におけるSTEAMは、Artが入ることにより保育実践の幅が広がるのと同じ時に保育者の専門性向上に寄与できるのではないかと議論を行いました。今後の研究に有意義な示唆を得ることができました。（土谷）